
キクとカタナ

副露ももんが

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キクとカタナ

【Nコード】

N4534J

【作者名】

副露ももんが

【あらすじ】

祖父であり師範でもある寅じいの剣に憧れる少年・菊地龍之介。そんな彼はある日、禁止されている真剣に触れてみようと決心する。しかし、龍の紋様の付いた刀剣を握った瞬間、龍之介は異世界へと飛ばされてしまう。

自らを召喚士と名乗る少女・華多那^{カタナ}と出会った龍之介は、異世界で剣だけで生きていくことが出来るのか。

第巻話 「リュウとトラ」

ビュッ、ビュッ。

いつもの朝。いつも通りの朝稽古。一人きりの稽古場に空を斬る音だけが響く。

ビュッ、ビュッ。

何てこともない。いつも通り、木剣で一連の型を流すだけの稽古だ。

ビュッ、ビュッ。

菊池円心流。それが俺んちの道場の剣術名。ジジイは人を活かすための活人剣だ、なんて言ってるけど・・・何だよ、活人剣って。剣術なんざ、つまりは人を殺すための技なワケで、人を活かすって普通に矛盾してね？・・・まあ、そんなことはどうでもいいけど。

ビュッ！！

ガラッ。

勢い良く最後の太刀を振り抜いたと同時に、稽古場の戸が開いた。

「龍之介、お前また余計なことを考えとったな。音が違うわい、音が。」

はあ、と溜め息をつきながら近づいて来るのは、俺の爺ちゃん

この菊池剣術道場の師範。菊池寅次、通称『寅じい』である。

「なあ、寅じい。俺ももう16なんだしさ、そろそろ一度くらい真剣持たしてくれても良くない？」

俺は木剣を肩に担いで言った。

真剣は普段の稽古では持ち出されることは無い。しかし年に一度、正月に近所の神社で真剣を用いた寅じいの奉納演武が披露される。

俺が物心ついて初めてその演武を見たのが5歳の時。それ以前からも見ているのかもしれないが覚えているのはその時からだ。5歳の俺がそれを見た感想は「美しい」だった。もちろん当時の俺に美しいなんていう語彙力は無かったが、今思い返すとその言葉に尽きるのだった。かつこ良い、ではなかった。たしかにあの時感じたのは美しいという感情だったのだ。

寅じいのそれは演武というよりも円舞と呼んだほうがしっくりくるような気がする。菊池円心流の動きは自分を中心して円を描く様に刀剣を振るう剣術だ。極まればまるで舞のよう、芸術作品の域に達する……のだと思う。

そう、寅じいの剣術はまさに極まっているのだ。その究極の剣術（俺視点）に、真剣が合わされば誰しもが美しいと感じざるを得ないだろう、実際、毎年の正月には神社に大勢のギャラリーが現れる。一体どこからこんな人が湧いて来るのかと思えば、他の都道府県からも寅じいの奉納演武見たさに人が来ている始末。しかし、それだけのギャラリーがいたとしても、いざ奉納演武が始まると、凜とした空気が寅じいを中心に広がり周囲はしんと静まりかえる、まるで時間が止まり、寅じいとその手にある刀剣だけが動いているように、

俺は、その姿に憧れて剣術を習い始めたのだった。

「馬鹿者！お前のような奴に真剣なんぞ持たせたら、手からすっ

ば抜けてどこへ飛んでいくか分かったものではないわ！それと稽古場では師範と呼べと何度言えば分かる。この馬鹿者がっ！！」

寅じいの馬鹿でかい声が稽古場に響き渡る。

「馬鹿馬鹿言い過ぎだっつーの！ちょっとくらい良いだろ！この、けちけちジジイ！！」

そう吐き捨てると俺は一飛びに寅じいとの間合いを詰め、木剣を振り下ろした。

・・・入った！！

そう思った瞬間、目の前から寅じいが消え、かわりに天井が現れた。

あれ・・・・・・？

バアンツ！！

俺は背中から床に落ちたのだった。

「師に木剣とはいえ刃を向けるとは何たることかっ！！罰として稽古場の床の雑巾がけ100周じゃ！！この大馬鹿者めがっ！！！！」

そう言いつけると寅じいは戸をピシャリと閉めて出て行った。

また一人になった稽古場の中で、俺は天井を見上げ悔しさを感じながら、多分少しだけ笑っていたんじゃないかと思う。

第貳話 「うそスープ」

稽古場の雑巾がけ100周を終えた（実際は20周くらいでやめた）俺はすでに鳴くことすらやめてしまった腹の虫をなだめるため、ミシミシと音のする渡り廊下を駆け足に母屋へと向かった。

いつもの味噌汁の香りがする茶の間では、すでに寅じいと母さんが朝食を食べ始めていて、俺の分も、まるで来るタイミングが分かっていたように用意されていた。

「早かったな龍之介。まあ、どうせまた10周やそこらで音を上げたんじゃろうがな…」

寅じいが顔も向けずに言った。

20周はやった、と喉元まで出かったのをぐつと堪え、食卓の定位置につく。今日の味噌汁には豆腐が浮かんでいた。

「また何かしでかしたのね…龍ちゃん。」

母さんが呆れ顔で言う。

「…何もしてねえよ。」

まさか、寅じいに攻めかかったとは言えない。そんなことをすっかり漏らそうものなら、母さんは鬼神となって怒髪は天を突くだろう。無論、俺と寅じいにとってあんな事は日常茶飯時のスキンシップみたいなものだし、まず間違っても俺が寅じいを打ち倒すなんて結果には成り得ないのだ。

「おい、龍之介。お前は何故真剣を握りたい？」

箸を置いた寅じいがおもむろに聞く。

寅じいに懂れて、なんてとても言えない。

「カツコいいから」と、俺は味噌汁を啜るふりをしながら答えた。

「私は、お前が真剣そのものにとののような思いを持つと別に構わん。それを否定する気も無い………が、真剣もとい刀とは、人を傷つけるためのモノである事をゆめ忘れるな。」

「別につ、俺はただ……！」

寅じいはそのまま茶の間を出て行ってしまった。

その後、母さんが何か言っていた気もしたがほとんど耳に入らず、口にした味噌汁はすでに冷めてしまっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4534j/>

キクとカタナ

2010年10月14日12時38分発行